

2019年度研究所学術活動報告（Seeds支援）

雑誌名	現代社会研究
巻	17
ページ	183-184
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011798



2019年度研究所学術活動報告（Seeds 支援） 「安全保障研究会」

1. 研究課題

安全保障研究会

2. 概要・目的

本研究会は、近年、国内外でインド太平洋地域におけるグローバルな広義の安全保障問題が重要視されてきている中で、当該地域の分析枠組みが必要であるという認識の下、当該「分析枠組みの構築」を目指すことを目的としている。

3. メンバー（構成）

- ・代表者：門脇邦夫(現代社会総合研究所客員研究員)
- ・協力者：秋場勝彦(東洋大学法学部助教)
齋藤 洋(東洋大学法学部教授)
佐藤正俊(東洋大学経済学部非常勤講師)
Mallika Arachchige Nayana (Department of International Development Studies,
Graduate School of International Social Sciences, Yokohama National University)

4. 今年度の成果報告

今年度は、グループ研究会（共同研究会）として、新規に「安全保障研究会」を設立した。その端緒として、今年度の活動は、当該枠組みの構築のための「①予備的研究」および「②メンバー招集とディスカッション」を行った。また、研究会の一環（「③Seeds支援」）として、防衛法学会との共催による研究大会を開催した。

①予備的研究：CSIS DAYS 2019(ポスター発表)

詳細は、東京大学空間情報科学研究センター（Center for Spatial Information Science: CSIS）の下記URL (<http://www.csis.u-tokyo.ac.jp/blog/research/csis-days-2019/>) を参照されたい。

予備的研究として、「海洋状況把握（Maritime Domain Awareness: MDA）」を題材に、国際法（学）と「地理情報システム（Geographic Information System: GIS）」のコラボレーションを行い、国際スケールでの地図化について検討した。

質疑応答でも指摘されたが、衛星画像や「自動船舶識別装置（Automatic Identification System: AIS）」等の活用されるべきデータを国際認識にどのように組み込んでいくかは、今後の課題となった。

また、今回はローカルモランによる面的な隣接関係に着目した分析であったが、国際関係を認識する手法として、今後はネットワーク分析の手法にも視野を広げていきたい。

②メンバー招集とディスカッション：暫定的な問題の設定

メンバーは、国際法学、人文地理学、国際経済学、公共政策学、国際開発学、国際リスク管理論、GISなどに関心分野とするが、国際スケールでの分析枠組みを構築する共通課題を有している。将来的には国際共同研究プロジェクトへと発展する可能性を有しており、代表者として今年度は次年度からスリランカへ渡航するための計画を行なった。研究会の実施方法は、参加メンバーが必ずしも日本国内に滞在していないことを考慮し、FaceTimeオーディオ等によるディスタンス研究会を実施している。

研究会は、国際法学、国際リスク管理論、国際開発学の3つの視点に集約し、共通の分析枠組みの構築を模索している。これらの視点からGISによって国際スケールの地理情報をどのように整備し、活用するかという問題を枠組み構築の端緒として設定した。

各メンバーによる具体的な問題関心は、必ずしも一致しないが、方向性としては、広義の安全保障環境を認

識するための「インデックス(指標)化」を目指しているところである。

③Seeds支援：第151回防衛法学会(春季研究大会)

日 時：2019年5月25日(土) 13時00分-16時40分

会 場：東洋大学白山キャンパス6号館 6203教室

テーマ：憲法改正—第9条と緊急事態条項

© 2020 Toyo University Institute of Social Sciences